

ある外科医のモチベーション

西美濃厚生病院

飯田 辰美



昭和52年地方の医学部を卒業、私を誘ってくれた唯一の先輩がいる母校の第一外科に入局。首から下は全て切れる外科医にということで大学・関連病院を回り、学位をいただいてからは一般消化器外科医の道に入りました。

化学療法（抗がん剤）が何たるかも知らず、癌はとれるだけとるのが外科医と考え、診断医と合意した切離線を一途に追ってきました。10数年目、医局に呼び戻され、講師になったころから“集学的治療”なる言葉があちこちから聞こえるようになっていました。折りしも研修にいかせていただいた国立がんセンターで、癌に対峙する頭脳集団の奮闘ぶりを見せていただいたこともあって、あらゆる方向から癌を攻めなくてはならないことを学びました。

外来医長・病棟医長・医局長と大学では臨床主体の事務職（？）が5年ほど続き、外の病院に出て、思いっきり臨床の外科をしたくなりました。人事の予定の一番に自分の名前を書いて、当然のことながら時の教授の逆鱗に触れ医局長更迭・手術なし4ヶ月を経て現在の病院に赴任しました。

“農協の病院”と呼ばれ、大学病院や公立病院に引け目を感じつつも、医療レベルは何とか追いついてゆこうと必死でした。でなければ、手術と化学療法だけの集学しかできない“農協の病院”にわざわざ来て下さる患者さんに申し訳がないとの思いでした。隣の街には比較にならないくらい立派な市民病院があり、親切に検査をして挙句に

紹介状を書いて欲しいと言われることも一再ならずありました。腐りかけると、とつてもすっきり切除できて、ニコニコ退院する人が出てきて、もう少し頑張ろうもう少し頑張ろうと12年が経ってしまいました。

赴任して1年ほど経ち、うちで手術をさせていただきさる癌の患者さんは、高齢者や合併症があって隣街に行くことができないくらい進行している方が多いことを体感できました。大きな切除標本がHE染色の病理組織学的病期分類がすむと処分されてしまうのがとても残念に思えるようになり、こんなに大きく育ってしまった癌には形態学以外の情報も詰まっているはずと遅まきながら気がつきました。

少しまじめに文献を見ればそこはもう情報の山、免染・酵素測定・遺伝子 etc. でした。いずれも当院で簡単にできるものはなく、協力者を探しだすところから始めました。酵素測定に協力していただけたところが見つかり、まずターゲット腫瘍として進行癌治療でしばしば遭遇する転移性肝癌を考えました。酵素はFU系抗腫瘍薬の代謝にかかわるPyNpaseとしました。転移性肝癌は可及的切除とリザーバー留置による動注化学療法を行う方針でしたので、病理確認の意味もあり、ほぼ全例で少なくとも1個は標本を切除させていただける体制でした。原発巣における測定はすでにいくつか報告がなされていましたが、転移病巣での報告がないことに着目しました。少数例でしたが、1997年の第97回日本外科学会総会において発表させていただくことができました。しかし、

翌年には数倍の症例数で同様の発表をする大学が現れ、しかも1種類の酵素活性ではFU代謝がとても説明がつかないことも解り始めました。

2年ほどして、集学的治療からオーダーメイド治療なる用語が登場し、TSとDPDの測定をお願いできることになり、胃癌の組織から測定を始めました。さらに2年後OPRTの共同研究の仲間にも加えていただき、大腸癌について測定を始めました。いずれもまだまだ例数が少なく、進行度・治療と絡めた予後について一定の傾向を確認にいたっていません。しかし、興味は尽きず、いい年をしてと言われますが、追試を続けあちこちの学会で発表しています。

ほ 酵素の測定と併行して、外科医としての工夫・研究も開始しました。1、2年で入れ代わる若い先生たちが、症例数の少ない当院で、経験を積んだ外科医と同様な、安全で確実かつ患者さんのQOLを損なわない術式ができないかと考え、“器械を多用した胃切除・ビルロート1法再建”を始めました。まだ器械使用が保険適用になる前で、患者さんの同意や病院の同意を得るのに苦勞しましたが、協力が得られました。満足できる結果であったため我慢して続け、保険適

用になってからは当院の開腹胃切除の標準術式として定着しました。150余例について術後早期の結果は良好で、いくつかの学会で発表・検証しました。今後は中長期の栄養評価を含めた術式の再評価を行いご批判を仰ぐ予定であります。

入 局以来先輩から手ほどきを受け、続けてきた、PD後の膜空腸吻合や再建も症例数は少ないながら捨てられないテーマです。忘れたころある手術を、慣れだけの安全性で続けていてよいものやら悩ましいテーマであり、諸学会でご批判を仰ぎ検証を行っています。

卒後8年目でしたか、学位をいただいて赴任先の病院に帰ったとき、先輩に言われました。「学位をもらってからがほんとの外科医の勉強だよ。」と。その後、だらけた生活の中で時おり脳裏を掠める言葉でした。30年近く外科医でやってきましたが、何とかモチベーションを保っているのは患者さん・先輩・後輩・病院スタッフたちのおかげと、強く感じる今日この頃であります。

最後に、このような駄文掲載の機会をお与えくださった「W'Waves」関係者の皆様に深謝いたします。